幕末維新期農民日記にみる地域情報

――「大黒屋日記」の諸家関係記事について――

高木俊輔

はじめに

幕末維新期の村社会の様相を書き込んだ農民や庶民の日記について、筆者はひろくその所在を確認し、なかでも良質な内容を持つものについて検討を加えつつあるが、本稿では、信濃国筑摩郡馬籠村大脇兵右衛門信興の日記「年内諸事日記帳」（通称「大黒屋日記」）を素材とする。この日記原本は、現在神坂馬籠の藤村記念館が保管している。この「大黒屋日記」は、島崎藤村がこの日記から丹念なメモを取ったものを「大黒屋日記抄」と名付けたことから、通称「大黒屋日記」といわれるようになった。(1)

島崎家は馬籠村の庄屋で本陣であり、隣の大脇家は代々年寄役をしていたが、幕末維新期の当主兵右衛門信興は、たいへん筆まめで、彼がほぼ四十年間にわたって書き残したものが「年内諸事日記帳」である。藤村がこの日記の所在を知ってから「大黒屋日記抄」を作り、さらに長編小説に練り上げて『夜明け前』が生み出されたのである。たまたま昨今の市町村合併の結果、この神坂馬籠地域は中津川市に合併編入されたので、島崎藤村のふるさとは、現在の

行政区画では長野県（信濃国）から岐阜県（美濃国）へ、山口村神坂から中津川市へと移行したが、この日記が示す信濃国馬籠から美濃国中津川一帯の地域社会のありようは、予想以上に一体感があったように思われる。

さて、本稿では、「大黒屋日記」という記事数でいえば四万二千二百件余りの中から、隣村も含めて家ごとに記事を抽出し、それぞれの家がどのように特徴づけられるのか、を問題にしていきたい。具体的には、まず、大黒屋大脇家の隣家島崎家をとりあげ、つぎに美濃中津川の諸家、ここでは中津川の幕末期平田門国学者諸家――間家（はざま）・馬島家・肥田家・市岡家をみていきたい。

記事のなかでは、圧倒的に隣家島崎家に関するものが多い。記事の抽出の仕方については、島崎家の場合、検索をかけるキーワードとして、本陣、島崎、嶋崎、吉左衛門、禎蔵（正樹の別名）、禎三郎（同）、縫、桂、雪、ゆき、などを使った。しかし、検索をかければ、島崎家以外のものも抽出してくるものなので、不必要な部分を排除する必要がある。島崎家の場合、本陣では、中津川・落合・妻籠・苗木・大井・三留野・野尻・須原・御嵩などの本陣の記事を除き、脇本陣の記事も島崎家の記事からは除外する。島崎では、妻籠村・湯舟沢村などの島崎家を除く一方で、嶋崎の漢字で書かれているものを検索して加える必要がある。その他、島崎家の家族の人名で書かれている記事を加える必要があり、別名たとえば、初名・幼名・諱・号・隠居名なども丹念に調べて加える必要がある。

中津川でも、家ごとの記事はキーワードによる検索によって集積する。たとえば間家の場合を示してみよう。間家は羽間とも書き、屋号を山半傘といって分家筋にあたる。間本家は杢右衛門といい、十八屋・十八や・忠七などとしても出てくる。また、間でもいくつかの親戚を含んでいるので、中津川分の間家は拾い出しておく必要がある。半兵衛で検索しても、寺道半兵衛・羽鳥半兵衛・亀子半兵衛などがあり、杢右衛門でも山口杢右衛門・楯杢右衛門・湊屋杢右衛門・大井杢右衛門・羽鳥杢右衛門などがあり、忠七でも角八忠七・扇屋忠七などがある。これらを除外する必

要がある。

できるだけの配慮はしたが、まだ同名異人・異家が入っていたり、拾い残した記事もあるかも知れない。しかし、大部分の記事は集積できたものと思われるので、以下でそれぞれの家ごとに特徴づけを行っていきたい。

一、信濃国馬籠村島崎家

（一）島崎家の家族関係記事について

島崎家の通り名は、吉左衛門であった。記事のなかで、島崎家のことが吉左衛門として出てくるほとんどは、公務にかかわる記事のようにみえる。その多くは、木曾福島役所への出勤である。その他村役人としては、尾州への出府、岩村行き、妻籠・中津川・野尻・苗木などへ出かける記事が多い。

本陣ということばで示される記事には、公私にわたる内容がみられる。公務を除いて、島崎家の家関係記事の最初は、天保二年（一八三一）五月二十一日に「御本陣おゆかサ産後御病気ニ付」とあり、つづく二十五日には「本陣おゆかサ産後御病気之処御死去」とある。この「ゆか」は、島崎藤村『夜明け前』の主人公である青山半蔵、つまり島崎正樹の生母にあたる由嘉（『夜明け前』ではお袖）であり、父重韶（『夜明け前』では吉左衛門）の妻である。この時、重い出産で産後の肥立ちが悪く、数え三十二歳で亡くなってしまう。そして、重韶は二年後の天保四年には、後添えとしてお桂（『夜明け前』ではおまん）を迎えたが、再婚のせいかこの挙式は慎ましく執り行われたようで、「大黒屋日記」中に関係記事はみえない。

天保十一年十一月二十日に、「島崎吉左衛門殿退役御免ニ付、跡役祝次郎殿被仰付候」とある。この吉左衛門は先

代の周次郎のことで、退役が認められ、代わりに子の祝次郎である重韶が、天保十二年一月十八日に「吉左衛門殿家督相続慶事へ相招レ申候」とあって、家督を継いでいる。以後重韶が当主として吉左衛門を名のり、「大黒屋日記」には、吉左衛門、本陣・本陣主人などとして出てくるが、俳号である至徳や文久二年後は隠居名半六でも出てくる。明治二年八月四日に数え七十一歳で死去するが、『夜明け前』第一部では幕末の島崎家を担う重要な役割を果たしている。

吉左衛門は、岩村の山上新左衛門の子で馬籠の島崎家へ養子入りした人物である。そのため、弘化元年（一八四四）三月十八日の「岩村御母堂御死去ニ付御出被成候」、同四月十日の「岩村森御老母様御遊ニ御出被成候、所々御土産有之候」など、岩村との往来を示す記事がみられる。「大黒屋日記」には、吉左衛門に関して、後妻お桂の実母（諏訪藩士坂本台造家内）の死、父親である隠居範助の死、後妻お桂の連れ子由岐（お雪）の結婚、前妻ゆか（由嘉）の生まれ代わりのように生を受けた禎三郎（のちの正樹、『夜明け前』の主人公青山半蔵）の病気や結婚のこと、などなどが続いている。

禎三郎（のちの正樹）についての記事は、嘉永四年（一八五一）十二月十四日に「本陣禎三郎殿少々気分不宣心配之事ニ候」、同十六日に「本陣御家内衆中相招候処、禎三郎殿病気差起りニ付至而麁末之事ニ而、親類中も格別酒宴も無之」、同十八日に「禎三郎殿今朝より又々差起り強候ニ付本陣へ見舞相詰申候」とあり、一日おきに家族や周囲を心配させる発作を起こしていた。そのため、嘉永五年の正月は年始の挨拶を日延べしていた。嘉永四年十二月二十九日の記事に「本陣禎三郎殿病気ニ付本陣年詞峠村例年正月二日ニ御座候処、来二月朔日迄差控候様峠村中へ申渡候」とあり、翌嘉永五年一月二日は「峠村中年礼、本陣禎三郎殿病気ニ付二月朔日へ相延候外年礼相済」とある。

『夜明け前』の主人公島崎正樹は、隣家の記録からみても、明らかに腺病質な幼少時代を送っていたことが知られ

る。なお、その後文久二年四月九日の記事に「本陣主人俄ニ中風発しびくりいたし、早々見舞ニ参候……右之手足共少々不自由ニ相成候、言語常躰ニ相変り不申、先々安心仕候」とあって、後に中風が命取りになったのである。明治二年七月にこの病を再発し、ついで八月四日終に死去した。八月四日の日記に、大脇信興は「本陣隠居当年七拾壱歳、久敷中風ニ付引籠被成候処当六月頃より再起りニ而、終ニ養生不相叶暮六ツ時死去被成候」と書いている。

禎三郎は、文久二年（一八六二）十一月五日に島崎家の家督を嗣いだ。「島崎禎三郎殿役儀披露振舞、惣役人中相招申候」、つまり重韻に代り当主となり村役を勤めることが役人中に御披露目されている。これ以後、重韻は本陣隠居または隠居半六となり、禎三郎（正樹）は吉左衛門を名のったのだが、「大黒屋日記」では明治三年九月四日に「本陣ニ而吉左衛門殿一周忌、御仏事御興行皆々御招レ申候」とあり、重韻は死後も吉左衛門であり、禎三郎は本陣と書かれているのみである。小説『夜明け前』でも、重韻は死ぬまで吉左衛門であった。

さて、禎三郎の結婚問題であるが、始まりは嘉永四年十一月九日に「島崎氏、妻籠宿へ禎三郎病気全快之御礼ニ参り候」とあり、「大黒屋日記」の記述はこれだけであるが、病気全快の御礼に出かけた先の妻籠本陣で、縁談の口火が切られたものと思われる。翌十二月十六日、「本陣縁談妻籠本陣娘申受度頃日李助罷出候処、今日源蔵被参相整候由島崎御主人御吹聴ニ御出被下候」とあり、島崎吉左衛門自身が大黒屋へ「御吹聴」に来たというから、話はまとまったのである。吉左衛門は、嘉永六年八月に自分の里である岩村へ禎三郎を伴って行って報告した後、同年十一月二十二日に結納、十二月一日に結婚式（「婚礼娵引取」）で、大脇信興は式のあいだ隣家として詰めていた（「拙者共慶事中相詰」）のである。この時、禎三郎は数え二十三歳、妻籠本陣島崎与次右衛門妹お縫は数え十六歳であった。

結婚の次は、子供の誕生のことになる。大脇家が、本陣禎三郎とお縫との間に生まれてくる新しい命に関心をよせていたことは、「大黒屋日記」に多く記述されていることからもわかる。まず、安政元年（一八五四）五月二十四日

に「本陣おぬい帯祝ニ付、お玉相招レ御祝儀申上候」と出てくる。お玉は、日記の記述者大脇信興の妻である。この初めての子は、同年十月一日に「本陣お縫安産男子出生之処、残念ニ而直ニ死ス」とあり、生まれながら直後に亡くなっていた。禎三郎夫婦は、この死にもめげず、安政三年二月九日には女児を得ている。二月十日の記事に「本陣お縫、昨夜四ツ時安産女子出生」とある。これが長女園子で、『夜明け前』では父想いのお粂のモデルである。

園子につづく禎三郎・お縫の子供たちについてみると、長男の秀雄は、安政五年八月十一日に、簡単に「夜本陣お縫安産男子出生」と書かれているだけである。次男広助の記事はないが、つづいて二人の女の子のことが出てくる。お継については、慶応二年七月十五日に「本陣小児おつき長病之処九ツ時死去いたし候」、お楊については、慶応四年七月八日に「本陣小児久敷大病之処、終ニ養生不相叶死去致候」とあり、生後長く病んだと記されているが、ともに早世した。お楊の死からほぼ一年後にあたる明治三年七月八日、「本陣お縫事安産男子出生被致候、夜一番鶏」とあり、友弥の誕生を記録している。

なお、この次に明治五年二月十七日に生まれる子が春樹であり、後の島崎藤村にあたる。「大黒屋日記」の記録者大脇信興は、明治三年に死去したので、この日記中に藤村の出生記事は書かれることはなかった。しかしながら、隣家島崎家に関する記事をみてくると、この日記はきわめて詳細な情報を持っているということができる。

重韻吉左衛門の後妻として馬籠に嫁いできたお桂と、その連れ子お雪に関する記事も少なくない。お桂は、禎三郎（正樹、『夜明け前』の青山半蔵）の継母になる。お桂は、もともと高遠藩士坂本天山という砲術家・漢学者の孫娘であり、伊那谷南殿村の豪農有賀家の仲介があって、吉左衛門の後添えとして木曾馬籠へと来たのであった。嘉永元年十月に実母の死に関して記事があるが、そこでは「諏訪坂本御老母」とされている。これは坂本天山の妻が諏訪藩士吉田式部左衛門の娘であったからである。

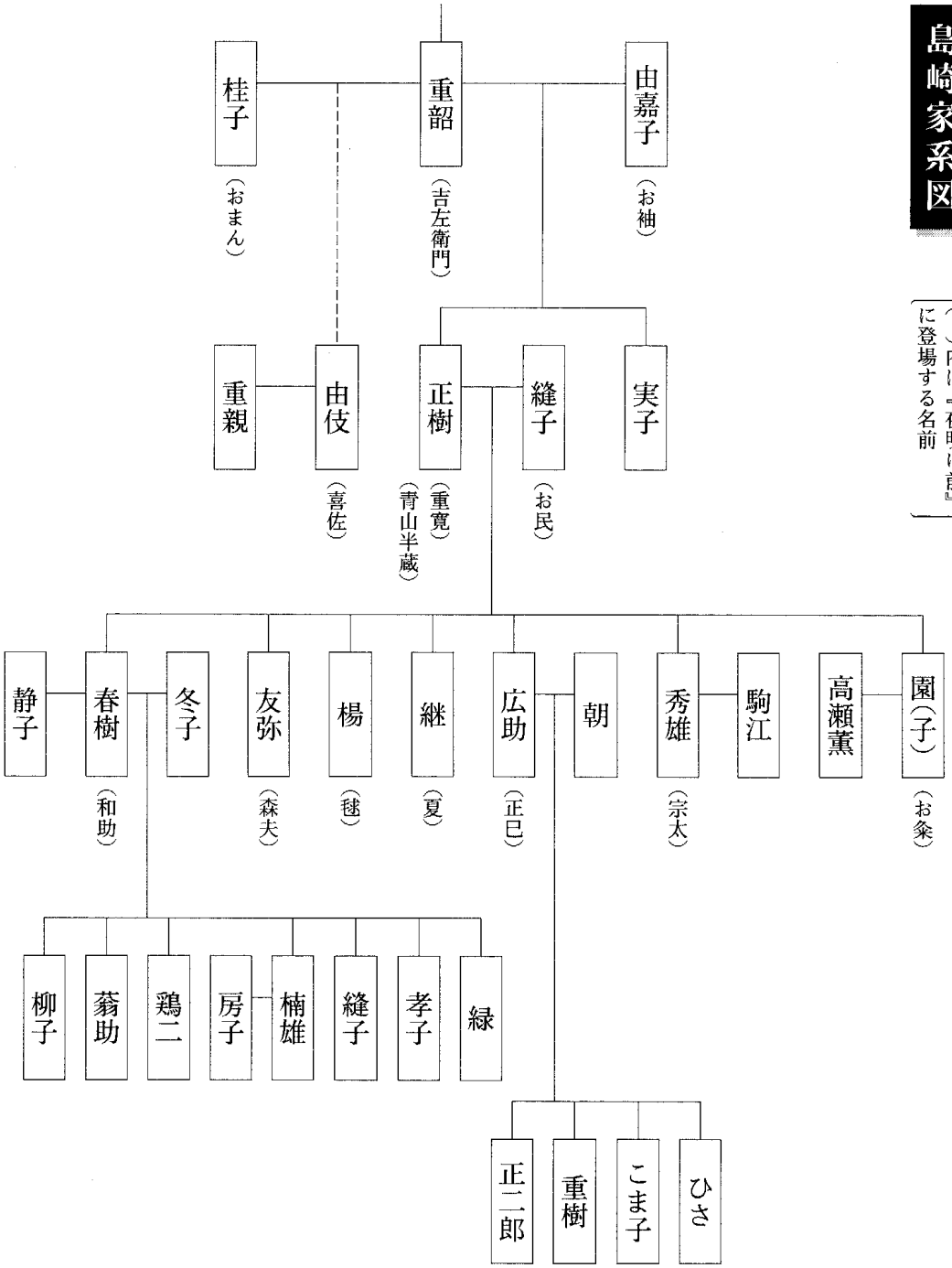
お桂の母おゑつは、父坂本天山が高遠藩を失脚閉門となった翌年に生まれ、南殿村有賀家に養女に出され、有賀家に養子入りした紋三郎との結婚に破れ、ついで上伊那郡大出村の井沢岡右衛門と再婚した。お桂も、まず高遠藩領市之瀬村へ縁づき、ここを離縁後木曾上松宿に再縁し、ここで由伎（お雪）が生まれた。この間の事情・経過はよくわからないが、幕末の村社会に淀んでいた因習のなかで、それに抗し、より積極的に人生と取り組んだ軌跡をみることができる。(2)

お桂の連れ子のお雪の記事が出てくるのは、安政二年からである。お雪は、大脇家との縁がまとまり、大脇又右衛門と結婚した。すでに一女をもうけていた安政二年九月二十二日に「お雪どの本陣へ暫預ケ、内輪訳合有之候」と記されている。二人は、別居状態に入ったことになる。同年十一月十四日に「お雪どの荷物本陣へ相渡申候」とあり、事態は別居から離婚状態に転じたのである。つづいて十一月二十六日には、「又右衛門小児召連あら町迄参候処、本陣お雪どの追かけ小児中津川へ遣り候事中々承知無之」とある。どのような結末になったかは不明だが、この離別は、小児の親権を巡ってこじれ、母親お雪が馬籠荒町まで小児を追いかける事態になっていた。

お雪については三年後の安政五年九月、禎三郎の里である岩村の人との再婚話がまとまった記事が出てくる。同年九月十一日に「本陣お雪サヘ岩村より千十郎殿聟ニ貰被成、就吉日当日引取祝盃相済……」とあって、お雪は再婚し馬籠村に定着することになる。そして、安政六年十月十八日に「夜本陣お雪殿安産男子出生」、文久元年四月十二日に「本陣おゆきサ安産男子出生被成候」とあいついで安産の記事がつづく。(3)

島崎家系図

（　）内は『夜明け前』に登場する名前



（二）島崎家の村役人的側面

島崎家は、馬籠村の開発地主として、十八世紀前半の享保期には村高の四割を持つ有力農民であった。そのため、代々馬籠村の庄屋役を務め、木曾十一宿の一つ馬籠宿の本陣・問屋であったといわれる。[4] 本稿が対象とする江戸後期・幕末段階に、問屋職をしていたか不明な点があるが、本陣を含めて島崎家の村役人の側面が、この「大黒屋日記」にどのように出てくるか、どのような書かれ方をしているかを取り上げることにしたい。

村役人としての機能は、領主たる木曾福島山村甚兵衛代官所との往復、代官の命令を受けての行動、尾張や代官所役人の来村への対応など、ひろくみて「御用」としての公務、また村落間の合議や係争、自村内に生起するさまざまな問題に対応する「村用」、の二つの面がある。「大黒屋日記」にみる島崎家の記事数は、大脇の自家大黒屋に関する約八百件より多く、千百件をこえている。これらの記事の内容を垣間見ておこう。

まず、公務として福島へ出向く時は、「御呼出ニ付」と書かれる場合もあるが、「福島江出勤」「福島御用」などとすることが多い。また、「出張」と記すこともあるが、後述するように、役所からの公務というより村々の件で、村方の都合のためという意味合いが強かったようにみえる。「出勤」と「出張」とは、明確に区別して使っていたわけでもなさそうである。

福島役所へ出かける場合には、例えば、天保二年一月二十七日に「吉左衛門殿福島江出勤ニ御座候」とし、同年四月十五日に「吉左衛門殿福島より御帰」というように記される。出勤（一つ出役を含む）の記述をいくつかみておこう。

天保六年四月十六日　吉左衛門殿五兵衛召連、目明小兵衛共盗賊一件尾州江出府致候

天保十四年三月九日　島崎吉左衛門殿先月二十七日出役、福島宿役人中馬方入組ニ付、右取扱方被仰付候処諸事
済ニ付引取申候
弘化二年一月十二日　大井米出御奉行八木佐左衛門殿・市川庄兵衛殿御出張御帰り之節又々御頼有之候ニハ、御
役所ニ而御借り入金当三月限何程成共出来次第真似合呉候様御頼有之、委細吉左衛門殿江御頼置候
嘉永元年六月十二日　福島御役所より御剪紙至来、十四日四ツ時御用御呼出ニ付出勤名　吉左衛門・三右衛門・
源十郎・兵右衛門・組頭源八・久助
嘉永三年十一月二十八日　吉左衛門殿御切紙ニ而お呼出ニ付名代禎三郎殿出勤
嘉永四年二月十三日　島崎吉左衛門殿福島出勤、尤も御用筋谷中宿村ニて庄屋壱人ツヽ御呼出ニ付出張被致候
安政元年二月十二日　島崎吉左衛門殿助合之儀ニ付四ヶ宿寄合妻籠宿へ暮合より出張被成候
安政元年十二月二十一日　吉左衛門儀ハ御用向出精相勤候ニ付永代苗字帯刀御免被仰付候
万延元年八月二十四日　出勤吉左衛門殿より金談一條御役所より調達仕候様源十郎・拙者へ手紙至来……
明治元年十一月二十九日　島崎吉左衛門殿福島御切紙御用ニ付差出申候、尤も十一宿不残両人ツヽ出役被成候

馬籠村を代表して福島役所に出かけた島崎の動きを、大脇は欠かさず記録していたといえよう。安政元年、吉左衛門は、勤務出精のため苗字帯刀を許されたこともわかる。

島崎の出張は「出勤」として記されることが多かったが、「出張」の約半分には同じ公務が記されていた。例えば
天保十四年一月二十七日　御公役様於野尻宿御調ニ付、島崎吉左衛門殿・原三右衛門殿・蜂谷源右衛門・同利助・

同勝七外ニ組頭五兵衛・馬指弥平・人足指圧次郎〆八人出張いたし候

弘化二年五月七日　福島御用達御役所大借ニ付、谷中三十二ケ村御呼出御仕法ニ付宿方島崎吉左衛門・拙者両人御呼出出張仕候

嘉永二年五月十九日　吉左衛門殿書上物持参御普請役様御泊り中津川宿江御出張被成候

安政五年三月十七日　加州様若殿御下り御通行被遊候人足弐百人馬百疋馬籠より本山宿迄中通し、島崎吉左衛門殿御出張並原茂太夫殿ニも御出張被成候

安政五年四月一日　島崎吉左衛門殿先達而加州様中通しニ而諏訪宿迄出張之処、漸々御用相済御帰村被成候

明治三年四月二十七日　吉左衛門殿寿平治組頭仁兵衛福島出張被致候、明廿八日五ツ時総管所より御呼出ニ付出勤被致候、其節金札ニ而壱両壱分弐朱菅井利足金之内寿平治より預り申候

このように島崎家の庄屋としての実際の職務と行動が示されている。支配側からの要請や必要性からの公的機能に加えて、村方を代表する立場から、さまざまの動きをしている訳である。そのための行動範囲はひろい。信濃では妻籠・三留野・野尻・須原・上松・贄川・湯舟沢・など、美濃では中津川・落合・大井・大久手・御嵩・太田・加納など。それに馬籠の村内にあたる荒町・新茶屋・丸山・中ノカヤ・峠など、大黒屋大脇信興の記録に出てくる地名の分布もひろく、またその内容は村を構成する人々のこと、村境のこと、桧皮取りのこと、助郷のこと、それに金子受取りなど若干金銭に関することも含まれている。島崎家という枠組を取れば、この傾向はさらに大きくなるであろう。

またこの地域は、村方相互扶助・融通の柱としての講・無尽の行われた範囲でもあった。

大部分は「本陣ニ而会合」「本陣無尽会合」という形で記されているが、宿方発起、本陣発起ばかりでなく、苗木小

栗作右衛門無尽発起、福島織田武一郎様発起無尽、宮地半一郎様無尽発起、御勘定所発起無尽などへの協力に努めていたことがわかる。

（三）島崎家の本陣としての側面

島崎家は、街道交通の在村的要である本陣を勤めていた。幕藩制下の宿駅制は、参勤交代その他の通行をスムーズならしめるため、宿泊と休息の場を提供するという公務が課せられていた。この木曾の地に、何時、どのような人物や物の通行があったのか。島崎家に記録が残っていれば、緻密なデータベースを作成できようが、残念ながら度々の宿火災によって本陣の記録はない。「大黒屋日記」が、隣家本陣に往来したものをどれだけ網羅しているかは、定かでない。しかしこの日記からわかる本陣島崎家の宿泊・休息所としての機能の面を、抽出しておきたい。

「大黒屋日記」中の宿泊・休息に関する記事をみると、馬籠宿に関する止宿・泊だけでも七十件以上あり、通行・御休・小休・暫休などが四十件以上ある。まず、宿泊は、大名や幕府公役の来村時であったり、尾張藩や木曽福島役所の役人達の出張によるものが多く、少なくとも安政期まではこの傾向がつよい。年月は省略するが、次に藩や幕府関係者で、馬籠宿を通過し、宿泊したり休憩をとった例を示しておく。

・木曾福島関係……殿様・旦那様・山村大殿・山村三郎六郎様・石作団之丞様・白井源之丞様・萩野丈左衛門様・原九郎左衛門様、太田長左衛門・太田兵助・大高弥五助・亀子又左衛門・桑原与五右衛門・斉藤弥蔵・千田伝十郎・永井貞四郎・原宇平太、足軽加村桂八

・尾張藩関係……尾州大納言様・御若殿様・尾州様御家中・御普請奉行・御普請役人衆・御作事奉行・寺社御奉行・御寺方・御勘定奉行・御勘定御役人・御奉行目付・徒目付・御鷹方、御材木御頭様・御材木方、側

用人肥田孫左衛門・材木方加藤勇右衛門・加藤庫助・千村桂三郎・深津理兵衛、石田藤助・犬山隼人正・大沢紋之丞・五味様・佐藤百八・竹腰山城守・辻村様・服部久蔵・向井源之丞・八木佐市・渡辺半蔵

・御公役……御公役中川亮平様・鈴木幸一郎様・町田孫四郎様・飯田文右衛門様・小笠原美濃守様、公儀御勘定奉行・公儀林大学頭様

・諸藩関係……出雲…雲州様御家老

備前…岡山殿様・御家老伊木若狭様

因幡…因州様御家老・因州御藩中・御分家松平隠岐守

加賀…若殿様・加州様御家老松平丹後守様・御分家十万石御大名

紀伊…紀州様御家中・月並才領半兵衛・奥様・御女中様

久々里…殿様・大殿様・旦那様

岩村…殿様・若殿様・松平能登守様・御家中高瀬御新造様

苗木…遠山美濃守様・石原喜平次様・結城永節様・和田左五郎様・小栗嘉平治殿・小栗作右衛門殿・山下源十郎殿・山下彦太夫殿

水戸…水戸様御名代・姫君様・御先長持・御茶壺

安政期以後、この傾向は変化して民衆の宿泊・通過記事が多くなる。民衆でも、村役人で公用・公役のものを除いて年度ごとに事例を示すと

・安政元年……日蓮宗上下七拾人
・安政二年……飯田松尾町野田屋宗兵衛／武州三峯山大僧丈
・安政三年……久留米様御医師中島泰民／京都いせ屋徳助／飯田仙吉手代源之助
・安政四年……（鈴木）利左衛門／上松問屋十郎兵衛、外連中
・安政五年……京都油屋善三郎並柳助
・安政六年……鈴木利三郎御子息
・万延元年……岩村山形屋娵お慶／笹屋善助・庄助／多治見村加藤勘三郎／名古屋笹正／上松宿松原容一／老医師上村八郎左衛門
・文久二年……十八屋半兵衛
・文久三年……米屋おきり
・元治元年……落合泉屋粂之助／茄子川おミね／十八屋半兵衛
・慶応元年……美濃国谷汲之者
・慶応二年……大工浅吉／飯田川路村之人／細久手宿酒井吉右衛門／細久手宿笹屋清右衛門／菅井嘉兵衛並御嵩宿野呂万治郎／須原宿西尾・現金屋両家
・慶応三年……三州吉田住人／大鍬（湫）宿柳屋五人／山半おらい
・慶応四年……間半兵衛／御嵩宿野呂万二郎／蜂谷繁次郎、組頭嘉兵衛・源之助／中津川肥田九郎兵衛／御嵩宿野呂万二郎／大井法印／須原宿善右衛門・大工良助／田丸屋おひさ・大つ屋おミち・寿平二／（妻籠）与

次右衛門

・明治二年……中津川半平衛／平田延太郎／（間）お谷・ば、サ／妻籠与次右衛門／中津川九郎兵衛・半兵衛・万兵衛／間半兵衛／大井宿武兵衛／大井宿関屋九右衛門／須原宿富吉・おこふ

・明治三年……須原宿西尾禎助・松本商人壱人／御嵩駅野呂半助／おらい・お谷・おすゞ／山半お谷・おすゞ・千代／須原宿現金屋禎助／中津川菅井嘉兵衛／野尻宿綿屋儀兵衛母

幕末押し迫ったところで民衆に関する記述が多くなるが、京都油屋・京都伊勢屋・名古屋笹正・飯田野田屋・上松問屋・中津川十八屋・菅井嘉兵衛など商人たちについてのものが多い。つまり、この街道の往来は、商品流通の担い手である商人たちが主役になりつつあったのである。日記の書き手大黒屋からすれば、大名はじめ支配者層から民間人にいたるまで、通行し宿泊した人々をこれだけ記録しているということは、必ず本陣にかかわった人々と接し、時々刻々と変わる情報を得ていたことになる。宿場にもたらされた情報は、本陣が独り占めしていたのでなく、村政—宿場を担う者たちが共有していたのである。

（四）島崎家の文化人的側面

島崎家は、既に述べたように庄屋であり本陣であった。と同時に吉左衛門は、馬籠村では唯一の平田門国学者であり、俳諧・囲碁・将棋を嗜み、芝居は見物ばかりでなく俳優もした、地域の名望家といえる人物であった。このいわゆる旦那的文化人といえる側面を、村内や周辺村々の人びととの交流の問題も含めて、取り上げていってみたい。ただ、「大黒屋日記」を素材とする本稿では、学問や文芸の中身まで立ち入ることはできない。

村落生活には娯楽が欠かせなかったが、この村では芝居・狂言・浄瑠璃・操り人形などがあった。

芝居は、本陣で上演することもあったが、周辺村に見物に出かけることも多かった。弘化二年六月の「中津川芝居見物ニ島崎氏・拙者両人参り候、同夜九ツ時帰宅」のように、大黒屋と連れだっての見物例もある。芝居は、祭礼時に上演されることが多かったようだが、嘉永期には「芝居も大流行大入ニ御座候」とある。狂言は、天保期までは本陣島崎家において開催している。大井、中津川、妻籠へと見物に出かけるようになっていて、文久二年には「妻籠狂言初日島崎隠居・永昌寺和尚様御出被成候」とある。また、安政元年九月に「本陣ニ而狂言稽古いたし候、一番鶏ニ済」とあるように、毎年九月に年中行事で上演されていたようである。

三味線と謡が入る浄瑠璃は、大坂・名古屋・江戸から旅回りの芸人が来て演じられた。馬籠の宿場の家々で席を開くこともあったようだが、中津川で演じる機会が多かったので、馬籠からも出かけていたであろう。操り人形は、日記では直接島崎家と関係する形では出てこないが、祭礼時に上演すること、舞台を必要としたこと、操株持ちが寄合で興行や舞台修復のことを議していることから、島崎家も村役として関わっていたことだろう。馬籠村では、万延元年で村内催しの記事はなくなり、慶応三年十一月の「中津川ニ而操芝居興行見物ニ参り申候」のように、操興行は中津川の見物だけになっていたようである。

芝居・狂言は、祭礼時に催されることが多い。また祭礼は、村落の責任者たる村役人と若者組の協力関係なしには開催・運用できない。村落生活のなかでは、いろいろなお祭りがあり、島崎家も大脇家も村役として参加していたであろう。その中で、本陣島崎家が直接関わったものが稲荷祭礼であった。すでに嘉永二年に、大脇家は「稲荷様御祭礼本陣へ相招レ申候」と本陣の祭礼に加わっていたが、安政末年から毎年稲荷大明神祭りは挙行され、村の有力者たちが招かれた。なお、慶応三年十月二十九日に「本陣坪之内庭江同断（太神宮様）御札下り被成、両家共賑々敷祝イ

申候由承り申候」、つづけて同年十一月一日「本陣問屋両家ニ而投餅御祝ひニ而誠賑々敷群集有之候」とあり、お札降りとつづく「ええじゃないか」の祝宴の様子を伝えている。

「大黒屋日記」中の馬籠村関係記事には、講や無尽記事が多い。講は伊勢太々講・秋葉代参講・神明講・庚申講・金毘羅講・恵比須講・津島講・観音講・地蔵講など、信仰や代参のためのものや、神明講や津島講に御日待がセットされている場合が多く、民衆信仰がさかんであったことがわかる。講といっても次第に信仰を主体としたものから、無尽講的な融通中心になり、幕末になればなるほど、金額を掲げたもの……五両講・十両講・廿両講・四十両講・五十両講・七十五両講・百両講・百五十両講・二百両講・三百両講・五百両講・千両講などが出てくる。講無尽会として、実際に金子を集める形になっている。本陣発起の多くが十二月に集中しているのは、主として年貢納入の不足分を補い融通するためのものであった、と想定される。

次に扱いたいのは、本陣・吉左衛門家の「御日待」「家祈祷」に関する記事が少なくない点である。共に、村びとや縁者を招いてご馳走を出したり、振舞酒をするものである。御日待は、代々講や神明講のような講時に行うばかりでなく、田植えが終わったり、一年の収穫を終えた時などに、豊作や無事の収穫を祈念したり感謝するため、さらに男二十四・四十二、女三十三歳の厄除け、雨乞い・火の用心などのため、村方一統を集めて行なうもので、村の、ひいては共同体の一体感を強める意味合いがあったであろう。家祈祷は、家内安全をかかげ、本陣では毎年一月十八日に人々を招待し振舞をしていたのだが、万延元年馬籠大火で本陣焼失後は、家祈祷の記事は消えてしまった。

本陣を中心とした村びととの交流は、馬籠村にとってまた島崎家にとって、安定的な存続のために不可欠な条件であったはずである。この側面は、現在でいえば「おつきあい」の範疇になる。その一端をみるために、島崎家関係記事を「招」というキーワードで検索してみた。抽出した記事は百七十件以上あり、そのうち本陣や吉左衛門方へ招い

たケースは、百十件をこえる。ただこれは、数字として正確なものではなく、傾向性をみるための検索であることをお断りしておきたい。

便宜的だが、西暦千八百年代で十年おきに検討すると、およそ三十年代が六件、四十年代が二十件、五十年代が五十四件、六十年代が三十件である。三、四十年代は家祈祷、稲荷祭礼が目立ち、祝儀も加わる。五十年代は稲荷祭り、家祈祷、節句、出生祝いなどが多い。六十年代は家祈祷が消え、稲荷祭礼、祥月仏事、役儀披露、忌明け、などが続く。

村内交流の面では、千八百五十年代から記事が多くなり、「病気全快披露振舞」「役儀披露振舞」「帯祝」「出生祝」忌明け」など、一見して私的にみえるが、島崎家は自家における催事を通じて、共同体的一体感の醸成もはかっていたのである。明治三年になっても、この傾向は続いている。二つの記事を示しておく。

明治三、二月十日　本陣稲荷大明神御祭りニハ兵右衛門（大黒屋…引用者注）招レ申候

明治三、四月二日　御本陣ニ而ば、さま祥月へお千代相招レ申候、並俵屋祥月御小僧参り家内皆高木やおだち、新茶やおきり子供迄参り居合申候

二、美濃国中津川諸家

（一）間家

間半兵衛秀矩は、『夜明け前』登場人物蜂谷香蔵のモデルである。中津川の代表的問屋商人間杢右衛門家の分家筋で、代々酒造業の家に生まれ、長男の夭折にともなって、天保十四年（一八四三）二十二歳で家督を嗣いだ。かんた

んに経歴をみると、弘化元年（一八四四）木曽福島山村代官より苗字帯刀を許され、中津川村の大組頭役についた。安政四年（一八五七）に杢右衛門より問屋業を引き継ぎ、安政六年には山村代官所の御勝手世話役となる一方、横浜へ生糸の売り込みに出、さらに同年、平田門国学に入門した。慶応元年（一八六五）二月から中津川宿の年寄役を勤め、維新後は内監察となるが、明治元年（一八六八）十二月に帰村している。(5)

半兵衛の宿場役人的機能は、「大黒屋日記」にはそれほど書かれていない。まず天保十二年八月、尾張藩の役人の廻村に際して、「御窺」に出た中津川・落合両村の庄屋衆に混じって名を連ねている。安政三年九月の、「山村旦那様恵那御登山」時に村役人の中に入って「御見送御供」をしている。文久元年（一八六一）九月に、「御公役野尻宿御泊りへ罷出」た後大黒屋へ立ち寄っている。同年十月の和宮通行時は、「御迎御同勢様方中津川御泊りニ而大取込ニ御座候、山半儀ハおらい病気ニ付御宿御断申上」と、母親の病気のため協力的ではなかったようだ。

半兵衛の動向は、維新後の日記の記述に比較的多くあらわれる。慶応四年では

一月十日　市岡正蔵・間半兵衛殿福島御用御出勤御用済御引取……

三月十日　中津川半兵衛殿岩倉様御下り御通行之節御供諏訪宿迄二月晦日着、三月三日朝出立ニ而いい田辺江廻り只今当方迄参り候

などとあり、新政下の明治二年には

三月十日　半兵衛方より天子様去冬御東幸之節半兵衛御供被致候御褒美、山村甚兵衛様刀身壱本頂戴仕候

四月十五日　中津川九郎兵衛・半兵衛・万兵衛殿三人、福島宿甚兵衛様急ニ中津川江御引越ニ付御用有之御出役被成候様御断有之

五月八日　中津川半兵衛福島宿迄御用ニ付出勤被致

十一月二十二日　山半半兵衛殿去春東都方へ参り候処、此度平田先生京都へ御帰りニ付右之御供ニ而御付添御出役被遊、今日御帰路ニ付拙者方へ御立寄被下

分家の半兵衛は、幕政下では支配者から一定の距離をとっていて、新政府成立直後は平田家や新政に協力的であったようにみえる。間家一族で、幕藩制下に商業経営に成功し、尾張藩からは「丸八」の屋号を拝領し、苗木藩の御用達になるなど特権的商人の位置を確立したのは、本家六代杢右衛門であった。七代が文人で商売を解さなかったため借金が嵩み、次の八代喜矩が塩商いを中心にして家財政を立て直したが、後述するように、安政三年に牛方騒動の矢面に立ち、問屋部分を分家半兵衛に譲った。これ以後は、油や綿は扱うが質業（金融業）に特化して成功する。杢右衛門は、町の年寄役の立場を重んじ、横浜の交易には手を出さず、尊攘的政治運動には一切関わらず、仲間が入門する中で国学門にも入らなかった。「大黒屋日記」が書かれたのは、本家八代の時期にあたる。[6]

ここでは、『夜明け前』においても、第一部幕末期の重要登場人物となる半兵衛に限って、「大黒屋日記」の記述をみておこう。間家記事は九百件をこえていて、半兵衛については、金融や資金関係では「山半」を、荷問屋や商業活動では間一族の屋号「十八屋」を使う傾向性がみえる。まず金融活動関係から、横浜生糸交易関係、平田国学や政治的対応関係、などについてまとめてみる。

半兵衛の金融関係であるが、これは当然大黒屋大脇家が必要を感じて書き残したものに限られるので、全部が知ら

れるものではない。しかし、多くの中から記述の一端を示してみる。

文政九年十二月　中津川十八屋半兵衛方へ金子持参為致……

天保十二年九月八日　山半江金子廿五両状箱入差遣申候……

天保十三年四月廿一日　彦七江相頼金子廿両山半江誂へ申候、尤米代金ニ御座候

弘化四年一月廿六日　中津川江年玉ニ参り候処、十八屋半兵衛方去冬店卸不都合ニ付、内輪相談之上当時不用道具売払可申筈相談相決申候

＊まだ半兵衛家は、金の取引では弱小、不安定な状況にあったようである。

嘉永元年六月七日　…十八屋半兵衛へ差遣候金子三十両受取書峠伊兵衛持参ニ而受取申候

嘉永二年一月廿二日　馬島氏御帰り兼吉遣ス

嘉永二年六月十六日　半兵衛金子之儀ニ付島田耕作殿相頼ニ罷出三十両借用いたし候、其上種々馳走ニ相成暮合帰宅

安政二年六月廿九日　中津川半兵衛より無尽加入之礼状

安政二年七月五日　十八屋半兵衛方より相続仕法書壱通並手紙相添至来披見いたし候

安政三年十月十八日　安保謙次郎殿へ金談之手紙壱通山半へ頼出ス

＊この頃、講無尽による融通記事は多いが、省略する。

安政六年四月五日　昨日山半より封印弐拾五両壱包、十両壱包、都合三十五両峠伊兵衛持参ニ而被参候処、先月此方ニ而取賄手繰出来候……

山半へ返戻いたし候金子三十両預り呉候様頼ニ付、又々此方へ差戻受取置申候

安政六年十二月廿九日　道之助中津川十八屋半兵衛方迄金子五十両持参並後藤氏薬礼相済候様申聞

万延元年四月廿八日　十八屋半兵衛より金子十両受取

万延元年五月十五日　山半金子弐拾両十二兼牛方持（参）受取申候

万延元年六月廿八日　山半より万吉使ニ参り金子三十五両取替相渡申候

万延元年六月三十日　山半より弐朱金十五両包下り谷周吉持参ニ而受取申候、弐十両分印紙壱通受取

文久三年五月廿八日　中津川山半より飛脚参り手紙半兵衛より持参ニ付、金子八拾両取替飛脚之者へ相渡申候

文久三年五月三十日　扇屋平六中津川行ニ付山半江金子廿両誂へ遣ス

元治元年一月廿日　中津川山半より使参り通帳受取並金子百両急入用ニ付頼有、丸八両家ニ而五十両ツ、出金、二月切取替相渡申候

元治元年三月二十八日……並ニ山半より金子百両返済ニ付是又持参いたし慥ニ受取申候

元治元年十一月廿七日（水戸浪士）中津川辺ニ而十八屋杢右衛門・㊅半兵衛両人之者ヲ呼出金子弐百両無心有之候ニ付、宿方へ引取相談之上交易仲満之者ニ而割付いたし差出候趣茂七参り承り申候……

＊この後二、三年の間、取替金、牛方荷送決済金、預り金、拠出金などの記述はほとんどない。政治政情が緊迫化する中で、小商い的なものを省略したか、実際に資金の取扱が激減した結果かはわからない。次の、慶応三年の例がある位である。

慶応三年二月二日　山半へ札引替弐拾四両弐分、矢張札ニ而為替遣し返事村方島崎より差遣申候

慶応三年二月四日　中津川十八屋亀吉殿参り候並新酒屋鉄吉殿いい田行ニ而御立寄、墨壱丁被下候、外ニ山本屋源吉参り店払三分三匁相払申候

半兵衛の商業活動で目立つのは、開港直後に横浜交易に乗り出したことである。中津川からは、後述する馬島靖庵、問屋の菅井嘉兵衛らとともにであった。彼等の平田学あるいは尊王攘夷思想の受容は柔軟的であり、商人的感覚の方が優先していた。馬籠村大脇信興が把握した半兵衛の横浜関連の動向は、安政六年から翌万延元年までの二年間に集中している。

安政六年九月廿九日　江戸出府中津川半兵衛・靖庵老両人衆より九月十六日認メ御手紙廿九日相届き披見いたし候

十一月　一日　十八屋半兵衛九月二日出立、糸持参江戸神奈川へ交易ニ参候処、糸売払余程利分も有之候ニ付暫滞留いたし候

安政七年一月十九日　……当節保金小判交易ニ付、壱両ニ而弐両余之売買ニ而当地八幡（万延元）へ咄込候処……山半よりも申参候処、金子壱両ニ而弐両弐分より三両迄ニ買集候趣、拙家ニも囲有之候ハ、右直段ニ而引受……

三月　七日　馬島靖庵殿江戸出府御立寄被下候

閏三月廿一日　中津川半兵衛・升七殿両人江戸横浜行ニ付朝四ツ時当分へ参り被立寄候

四月二十二日　馬島靖庵殿横浜より御引取ニ付金子二千四百両馬荷壱駄才領兵助付添帰村御立寄、半兵衛・九三儀ハ六月ニ相成候半而ハ帰村無之様子ニ御咄有之候、糸直段売上ケも多分利徳之趣小判も三両弐朱位イニ商候様御咄有之候

四月二十八日　十八屋半兵衛より金子十両受取

五月廿二日　当月二日相認メ横浜交易所へ出張半兵衛・九三より手紙、中津川兵助持参ニ而嘉兵衛殿より拙者方へ御連被下、慥ニ相届披見いたし候、明廿三日出立兵助迎ニ参候ニ付、直ニ返書相認メ同人へ相渡申候

五月廿六日　中津川兵助・半兵衛方横浜迄飛脚参候ニ付此間之返事差遣申候

八月　五日　江戸横浜出張十八屋半兵衛方より飛脚参候ニ付、為土産と錦絵拾三枚筆五本恵ミ被下候、外ニせった壱足送り被下候

八月　七日　横浜出張半兵衛より三留野宮川行手紙壱通のし紙三枚相添、山半より送り被遣候ニ付、峠鍋吉誂へ手紙相添遣申候

十月　十日　十八屋半兵衛・九三両人、当閏三月廿一日中津川出立ニ而横浜交易所へ糸商ニ罷出候処、最初者利分沢山ニ有之候得共ドル銀追々値下りニ相成莫大之損分相懸り、夫故無拠長滞留ニ相成不得止事右を以江戸表へも罷出夫々欠合付候へ共、ドル銀漸々三十弐匁位イ之処ニ仕切、始終之損分ニ相成、依而思切五日江戸出立ニ而両人共無事ニ帰宅致暮合此方出立いたし候、金はかり壱丁・のし、品々土産被下候

半兵衛らが、いち早く横浜交易に乗り出し、莫大な利益を上げて奔走する姿が浮かんでくるが、一年もしないうちに一転して逆に莫大な損失を被った現実を、大脇は横浜交易記事の最後に記している。

問屋で商家の大黒屋大脇氏は、無関心ではいられなかったであろう幕末の政治情勢、それに敏感に対応していた半兵衛らの政治的動き、も記述している。まず後述の馬島靖庵の紹介による、安政六年十月二十日の平田国学への入門、それに続く横浜での生糸売込みの動きがあるが、その後、直接西国方面に出かけた半兵衛のことが書かれている。文久二年二月二十二日に、半兵衛が次女おミつを連れて伊勢参宮に出かけるに際し、「餞別として金壱分」を遣わしている。およそ一ヶ月後に帰った半兵衛から「せった（雪駄）壱足」の土産を受け取っている。これは、翌年に京都へ出る布石であったようにみえる。

文久三年四月十三日、大黒屋へ「山半より京都御上京諸大名様御旅館並御屋敷絵図面被下候」とあり、半兵衛は西国情勢を入手する手段を得ていたようである。同五月四日、「中津川半兵衛・おミつ先達而京都へ参り帰り、伊勢太神宮へ参詣ニ而当月廿日帰宅之由、いろ〳〵土産被下候」、つまり伊勢参宮は、京都情勢を探る意味も持っていたのではなかろうか。同九月二日の記事は八、一八政変に続く天誅組の変について

「中川宮様御大将ニ而赤旗おし立、禁裏百姓と号し天誅組壱番より百番迄之旗相立、浪士始ハ二千人、追々相増五千人之同勢、外ニ長州・肥後・有馬加勢ニ而公儀陣屋を潰し、大和・河内大騒動紀州へも参り候よし、大坂へも向ふ様子ニ御座候、世の中さわかしく相成候間……（中略）……半兵衛より今朝申参候」

と書いている。半兵衛が入手した情報は、中津川とその周辺の有力農民たちへ伝えられていたのである。半兵衛が、京都へ出た元治元年とそれ以降の記事をみよう。

元治元年七月廿七日　十八屋半兵衛方より手紙参り披見之処、此節京都乱勢ニ付糸商ひ如何と心配ニ付又々上京致候趣申参候……今日出立之由ニ候

元治元年八月　一日　十八屋半兵衛より手紙至来披見致候処、此間上京之処大七殿京都より帰り伏見宿ニ而出合、其夜伏見泊り、翌二十九日中津川へ帰宅、商糸調候処廿八箇之内拾八箇京都出火ニ付焼失致候由、半兵衛より申参候

元治元年十月　七日　十八屋半兵衛京都より一昨五日頃帰村と申事ニ候、一向不帰候

＊半兵衛の相次ぐ京都行きから知らされる内容は、大黒屋にとってはすべて糸値段と関連させて受け取られていた。次の記事は、水戸浪士の中山道西上途中に中津川に立ち寄ったときの記述で、間一族が中心となって対応していたことを示している。

元治元年十一月廿七日　浪士出立……中津川辺ニ而十八屋・丸八丸半兵衛両人之者ヲ落合へ呼出、金子弐百両無心有之候ニ付宿方へ相談之上交易仲満之者ニ而割付いたし差出候趣、茂七参り承り申候、其外種々之咄有之候

＊これ以後、慶応四年一月の御一新までは「大黒屋日記」中に、半兵衛の政治情勢と関連する記事は見あたらない。しばらくの間は、宿に留まっていたようである。慶応四年も、まず福島役所の御用を勤め、官軍―岩倉東征軍が来てからこの地域の新政への転換に動いたのである。

慶応四年一月　九日　半兵衛福島御勝手御用ニ付御呼出被仰出、又々明朝出立……
一月　十日　市岡正蔵間半兵衛殿福島御用御出勤御立寄被下、唐紙半切・掛物一幅御恵被下候
三月　十日　中津川間半兵衛殿岩倉様御下り御通行之節御供諏訪迄二月晦日着、三月三日朝出立ニ而いい田辺江廻り只今当方迄参り候
十二月廿六日　山半主人江戸より当月廿三日ニ京都迄下向被致候、夫ニ用事相済し正月二日三日之内ニ中津川帰村可仕様子
明治二年二月十七日　山半より手紙至来、右者去冬東幸ニ付間半兵衛御内用御供ニ而御往来首尾能相勤候、為御褒美と天朝より金弐枚被下置候御風意聴文言大悦仕候
十一月廿二日　半兵衛殿江戸表未逗留ニ付種々噂承り候処、当節御代用ニ付帰宅之儀ハ何れ来春ならでハ帰村無之由咄有之候

間半兵衛関係のさいごに、今まで触れなかったが日記記事の大半を占める、身辺雑記的な特徴について見ておきたい。半兵衛が次男でありながら、長男の急死で忌明け後家督を嗣いだのは、天保十四年（一八四三）であった。それ以後を、ここでは取り上げていきたい。また、半兵衛の母「おらい」は、馬籠村大脇信興の実妹であり、馬籠・中津川の商家・村役人層では幾重にも姻戚関係が絡んでいたから、雑事的・日常的なことがらが沢山書き込まれている。

冠婚葬祭は、縁談・婚姻・安産などから死亡・葬式など、村社会における人々の往来・立寄り人、その人たちが持参したもの、などの記事が多い。その全貌を示す余裕はないが、信興妹・半兵衛母のおらいについて、若干加えておくと、里にあたる大黒屋への往来が頻繁であった。文久三年までは、一年に二、三回止まりであったものが、文久三

年が八回と急に多くなり、以後も毎年多く慶応四年は十三回を超えている。もちろん、里帰り、仏参り、親戚への挨拶などに加え、縁談を進めるためであったり、伊勢参宮の途中立寄りであったりし、その時々の贈答品はほとんどが食べ物であった。挨拶・祝儀・見舞・土産などには、鮎・瓜漬け・海老・柿・菓子・蒲鉾・木の子・魚・さつまいも・しめじ・梨子・生いなだ・真桑瓜・松茸・味噌・夕顔など、食べ物以外では扇子・筆・風呂敷・料紙などがあった。

（二）馬島家

中津川の問屋間家に養子入りし、間家の商業活動の一端に連なり、文化活動の一翼を担った馬島靖庵は、小説『夜明け前』の宮川寛斎のモデルである。ここでも、「大黒屋日記」に出てくる関係記事から、靖庵の人物像を捉えてみたい。

靖庵は、もとは美濃国苗木藩主遠山家の典医水野甫圃の弟にあたり、文化八年（一八一一）生まれである。『夜明け前』の主要登場人物の中では、最年長者にあたる。十代に、三河国津島の馬島明眼院で眼科医の修行をして、馬島を称するようになった。その後京都へ出て、大岡簾に漢学を、大原宗瑞に医学を学び、文政十二年（一八二九）には江戸へ出て、中井準之助・鳥居耀蔵・安積艮斎などに史記・漢書などを学び、天保六（一八三五）年二十五歳にして、法眼和尚に叙せられ「尾州公御目見得」となった。すでに、医者としても学者としても、公認されるところとなっていたのである。[7]

この天保六年に、中津川商家間家の分家間秀典姉きく（菊）と結婚して、馬島家に入ることになった。「大黒屋日記」天保六年の条に

二月十一日　馬嶋靖庵殿聟引取祝盃相済申候
九月十一日　中津川十八屋聟靖庵サ謙吉同道ニ而当方へ御出被成候
九月十三日　靖庵・謙吉御帰り被成候

とある。二月に養子入りのお祝いを済ませると、九月には十八屋間家の一員となって馬籠大脇家を訪ねている。靖庵は、結婚して間家の一員となったが、医業の師に私淑して一生涯馬島を名のり、中津川で開業した。しかし、中津川に留まった訳でなく、江戸へまた京都へと、行動の範囲はきわめてひろかった。結婚直後から

天保七年四月　八日　馬嶋靖庵サ江戸より御帰懸御立寄被成候
弘化二年九月三十日　昨夜中津川半兵衛より手紙参り、猶又馬島靖庵老京都へ着、彼地之様子委細ニ申参り候
弘化四年二月　十日　昨九日、馬島靖庵殿京都より帰宅被成候由承り申候

とあるように、医業ばかりでなく、情報を送ってくる役割を持っていたのであろう。

靖庵の行動範囲のひろさは、幕末期中津川にとっても必要なことであり、この地域に住むものに世情の変化を判断する材料を提供していたのである。勿論、靖庵の本業は医師として、眼病中心に医療行為を周辺村々にひろく展開することにあった。安政一、二年の地域医療の様子を示してみよう。

安政元年一月二十八日　下志水屋おミつとの俄ニ寒気当りニ而驚キ、靖庵薬籠中津川へとりニ飛脚遣ス

二月二十七日　馬島靖庵老当地出張医師へ御出申上候処、今日就吉晨弥議定相極り迎之者着れ薬等持運御入来被成候

三月二十四日（大津屋嘉兵衛方）病家ニ付靖庵老御泊りニ相成、翌廿五日早朝御帰宅被成候

三月二十七日　馬島氏昨日八幡屋へ見舞御出被成泊ル

五月　十五日　同夜八わたや隠居又々持病起馬島氏御出被成候

八月　十一日　八幡屋隠居持病大起り御座候、玄由・靖庵老両人御出被成候

十月　十八日　馬島靖庵老流行風ニ而大病ニ付又右衛門見舞参り候

十月　二十日　又右衛門靖庵老病気見舞ニ一昨日被参昼過帰宅いたし候

十一月二十四日　お玉病気ニ付馬島靖庵老相頼ミ道之助・元吉差遣申候

十一月二十五日　元吉中津川馬島へ薬とりニ靖庵老より差遣申候

十二月二十八日　中津川馬島へ薬礼金並先達而祝言之節三ツ目祝儀餅祝

安政二年五月　九日　春七少々眼病ニ付馬嶋靖庵老相煩し浅助差遣申候

十月　五日　馬島氏又右衛門少々病気ニ付御頼申上見舞ニ御越被下候

十一月十六日　馬島靖庵老和泉屋おゑいサ少々不快ニ付御見舞御出被成候

十二月　六日　馬島靖庵老和泉屋病人へ御見舞ニ御出被成候

というように、活発な活動をしている。とくに、中津川と馬籠を往来しては、診療・薬用を行っていた。大脇信興が靖庵の医療活動をどの程度把握していたかは不詳だが、地域にとっては欠かせない医師であったことは間違いない。

地域医療に加えて、馬島は安政三年から自ら講無尽を起こすようになった。安政三年一月二十一日「拙者（大脇信興）馬島靖庵老発キ五拾両講無尽初回ニ出席」が初出である。無尽を発起出来るということは、地域社会に信用が定着していることを物語るが、これから馬島は、毎年一月はじめに発起無尽の会を開いているので（慶応元年まで）、何らかのまとまった金を必要としたのである。この時期、安政六年十月七日に馬島は平田没後門に入門している。そして同じ十月廿日には、自分が紹介者となって同じ中津川の間半兵衛を入門させていた。(8)

他家の日記史料という性格から即断は許されないが、馬島が無尽を発起したのは金融業—貸金業に乗り出したというよりも、自由に使える資金を用意するためであったと思われる。それはなぜか。またこの時期、靖庵の医療活動は、ごく身内の—血縁者に限られていた。一つは、横浜へ生糸の売り込みを行ったことから、商業活動に賭けた傾向がある。この講無尽発起による資金集めは、四拾六歳からはじめ、五拾五歳の慶応元年までの間であった。

なお、慶応四年四月二十一日に「馬島靖庵殿伊勢宇治橋太夫様長家ニ而死去日成候」と出てくる。慶応期に三年間、三河国稲橋村古橋源六郎方に寄寓していたことのある馬島は、故郷とした美濃中津川に落ち着くことなく、慶応四年四月三日に異郷伊勢の地で客死したのであった。

（三）市岡家

「大黒屋日記」に、市岡がはじめて登場するのは、文政十年（一八二七）閏六月二十六日で、「同夜中津川宿役人半兵衛殿・六左衛門殿・助七殿・長右衛門殿福島出府ニ付、夜中御越被成候」とあり、宿役人として公務の仕事で出張の場面である。本陣と問屋を兼ねる市岡家は、後に庄屋役にも就いた家で、『夜明け前』の登場人物では、浅見景蔵のモデルである。

市岡長右衛門殷政は、信濃国伊那郡座光寺村庄屋北原家出身である。前代の市岡政武は同じ座光寺村北原家出身で、実は次兄にあたる。殷政の長兄は北原因信といい、その長男が伊那谷平田門国学の最高指導者北原稲雄である。市岡政武は、請われて中津川の市岡家に養子入りしたが、文政七年に死去した。まだ政武の子が幼少であったため、翌文政八年に政武の弟の殷政が、兄を相続する形で本陣市岡家の家督を相続し、長右衛門を襲名したのであった。[9]

天保元年（一八三〇）に苗字帯刀を許され、天保八年には家業の本陣・問屋に加えて庄屋役を兼ねた。天保末年まで「大黒屋日記」に出てくる長右衛門殷政は、宿役人としての公務による福島表への出張関係のみである。福島役所への往復時に、馬籠の大黒屋に立ち寄ったために、日記に書き残されたのである。しだいに信濃国飯田・伊那との往復が増える。それは、自分の出身地座光寺村との交流と共に、伊那谷国学者達との往来を推測させる。飯田行き記事は、万延元年、慶応三年にもあり、大黒屋に立ち寄るときは、決まって扇子一本をお土産にする習慣であった。

市岡長右衛門は、中津川の領主である福島代官山村氏とは、行政上の支配・被支配の関係よりも和歌・俳句の詠み手としてつながる面が強かったように思われるが、長右衛門の歌人・文化人的側面は、この日記中には、あまり書き留められていない。[10] また、「市岡殷政年譜」によると、嘉永期以後「風聞録」などで、時事的記事の集積をはじめていたし、文久二年（一八六二）十二月二十一日、長右衛門は同じ中津川の間半兵衛の紹介で平田門に入門し時代の動向に反応していたこと、文久から元治年間には京都へ出て、師岡正胤・権田直助・宮和田胤影・矢野玄道・香川敬三・井上頼圀らと交わり尊王攘夷の活動に入っていたこと、などが書かれているが、これらの側面もこの日記の記述には反映していない。

文久元年十月三日の記事に、和宮降嫁にともなう木曾路通行時の動向が記されている。馬籠村の庄屋島崎吉左衛門らと、助郷負担軽減のための上京に合流していた。

「島崎吉左衛門殿御通行人馬之儀ニ付京都迄罷出、美濃鵜沼宿より本山宿迄人足中通しニ御願申上度、道中御奉行様へ罷出候由ニ而中津川へ相見候、次郎平方ニ而御目ニ懸り、暮合市岡長右衛門殿御同伴ニ而大湫宿泊りニ御出立被成候、万事大騒動ニ相成申候」

中津川の明治維新に際して、市岡は地域を代表する村役・宿役人として、福島役所の指示に対応していった。慶応四年三月九日には、岩倉東征軍に平田学派が呼応する中で、「中津川宿市岡氏・肥田氏外平田先生門人衆中、岩倉御兄弟御同勢御供惣連中御帰路」とあるように、ここで官軍嚮導の任を終えて帰路についている。

（四）肥田家

中津川村の代々庄屋を勤めた肥田家は、問屋も兼ねる家であった。天保八年から一時期庄屋役を市岡長右衛門に譲るが、屋号を田丸屋といい、幕末の当主は九郎兵衛通光で、幼時から俳諧を嗜み、俳号を馬風といってこの地の俳諧では一家をなしたといわれる。

「大黒屋日記」における肥田家の初出は、天保十二年八月七日の「中津川田丸屋忌明ニ付与六殿・鎌七殿御両人御礼ニ御出被成候」である。天保十四年四月の扇塚供養執行の落合・中津川社中に、市岡長右衛門・羽間杢右衛門・羽間忠七・落合鈴木利兵衛・湯舟沢嶋田耕作・山口外垣三左衛門らとともに名を連ねている。同年六月七日には「中津川肥田氏より極内密書状至来」とあり、大脇家とも密な関係にあったことがわかる。

安政三年六月に九郎兵衛父肥田九助隠居が亡くなり、翌安政四年五月には、その春から義絶関係にあった十八屋半

兵衛と大黒屋兵右衛門の和解に奔走している。同年五月七日に「咄ニ而九郎兵衛殿・嘉兵衛殿・落合利左衛門殿、右三人連ニ而御出被成八幡屋へ御泊り被成候」、翌五月八日に「和熟之趣」つまり和解が整っている。このような村役相互の、福島関係役務出張や無尽金のこと、また冠婚葬祭関係記事が多い。

文久三年三月二十二日、九郎兵衛は同じ中津川間半兵衛の紹介により五拾歳にして平田没後門に入門したが、「大黒屋日記」には関連する記事がない。平田門とは関係を持とうとしなかった大脇信興だったため、この点に関する記事が欠落したのであろう。

最後に、慶応四年御一新当初の肥田関係記事を引用してみよう。

二月　六日　中津川肥田九郎兵衛殿福島江此間出勤御帰り御立寄被下候

二月廿三日　肥田九郎兵衛殿福島より御帰り、四ツ時御立寄本家ニ而御休

三月　九日　中津川宿市岡氏・肥田氏外平田先生門人衆中岩倉御兄弟御同勢御供惣連中御帰路ニ付、大津屋娵いい田より召連御帰り

閏四月　四日　中津川肥田九郎兵衛殿千賀様御用ニ付当宿御泊り迄御出張被成私方ニ御泊り被成候、並鵜沼宿年寄壱人軍見分太田御陣屋御差図ニより見届ケ方ニ江戸方迄参り候由、私方ニ御泊り今朝出立被成候

五月廿九日　木曾谷中百姓壱騎働隠り宿方百姓始メ妻籠・三留野・野尻・在方蘭村・柿其・与川其外在々不残凡人数千百五拾人余、中津川宿町端駒場村入口大橋迄誠ニ大群時之声上ケ、落合より中津川大橋迄大変之事ニ相成、御代官始メ並惣役人中揃方以留メ申候様子、肥田九郎兵衛殿ニハ直様

尾州表江御達し二参り候様子二噂承リ申候

七月廿七日　中津川肥田九郎兵衛殿福島御用ニ付俄ニ御出張被成御立寄有之候

九郎兵衛は御一新に際して、この谷の同志とともに官軍である岩倉東征軍の嚮導にあたり、その後は、戊辰戦争下の農兵騒動に直面する。日記中には「百姓壱騎」とあるが、小前百姓と尾張藩の間に入って調停に当たったのは、肥田九郎兵衛であった。『夜明け前』では小野三郎兵衛という名で、肥田の活躍ぶりが描かれている。(11)

おわりに

本稿では、農民日記の代表的な一つ「年内諸事日記帳」（通称「大黒屋日記」）を素材として、記述内容の取出し方の検討とその内容の豊富な点を提示することを目的とした。

近世・近代の日記史料は、一般庶民（中でも農民）が書き残したものでも、良質なものが少なくない。その記述内容を徹底的に活用すれば、村落内の民衆生活の細部まで描くことが出来るのではないか。村落、村社会は、階層分析や家単位のデータからだけでは描ききれない。個人単位の情報を生かすことによって、生活史や社会史の描写が可能になるのではないか。

また、本稿で「年内諸事日記帳」を取り上げたのは、島崎藤村の『夜明け前』の史学的検討も考えているからである。今のところ、小説家の利用した基本的な史料そのものの、史資料的検討を行う段階であるが、作品の背景、史料そのものの持つ世界の究明の上にたって、作品論を展開する試みが待たれるのではないだろうか。

注

(1) 「大黒屋日記抄」については、所三男「解題大黒屋日記抄」(『藤村全集』第十五巻　筑摩書房　一九六八)を参照。なお、「大黒屋日記抄」九冊は、馬籠の藤村記念館に所蔵されている。

(2) 島崎吉左衛門重韻の後妻お桂とその連れ子お雪については、北小路健『夜明け前」探求—伊那路の文献—』(明治書院　一九七四)を参照

(3) 北小路健『同上書』

(4) 島崎家については、所三男「島崎家の系譜」(『国文学・解釈と鑑賞』三十一巻九号　一九六六)参照

(5) 中津川間半兵衛の経歴は、水垣清編「間半兵衛秀矩翁年譜」(間孔太郎『間半兵衛秀矩集』自家版　一九七六)参照

(6) 間杢右衛門については、大島栄子『商人たちの明治維新』(花伝社　一九九八)参照

(7) 馬島靖庵については、市村咸人『伊那尊王思想史』(下伊那郡国民精神作興会　一九二九)と「馬島靖庵」(伊東一夫編『島崎藤村事典』明治書院　一九七二)参照

(8) 中津川では、馬島・間半兵衛に続いて文久二年十二月九日に市岡殷政が、文久三年一月に馬島秀一・菊子・鉾太郎、菅井九三、間一太郎、吉村伊織、同三月に肥田九郎兵衛・肥田四郎右衛門らが入門し、このほとんどは間半兵衛の紹介によるものであった。その後も入門者は増えて、中津川では全部で三十六人が入門した。

(9) 市岡長右衛門については、子孫の市岡正兄刊市岡殷政『土衛遺草』(一九八七)中の「市岡殷政年譜」を参照

(10) 前注『土衛遺草』、とくに「市岡殷政年譜」参照

(11) 高木俊輔『「夜明け前」の世界』平凡社　一九九八

＊付記　大脇兵右衛門信興の「年内諸事日記帳」の閲覧を許された、馬籠藤村記念館の副館長牧野式子氏に御礼を述べたい。また本稿は、平成十六年に始まる科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))による「幕末・明治期庶民日記に関する史料学的研究」の一部である。記して謝意を表する次第である。

(二〇〇五年一〇月一九日受理、一一月一六日採択)